

21世紀における観光のあり方 — 地域観光のスヌメー

別府大学短期大学部教授 浦 達雄

1. はじめに

1987年に施行された「総合保養地域整備法」(通称・リゾート法)は、わが国における観光地域の生成において様々な問題を投げかけた。リゾートマンション、ゴルフ場、スキー場、テーマパーク、マリーナーといった金太郎飴のような開発計画が全国のリゾート地域(リゾート法による指定領域)において練られたが、その大半はバブル経済の崩壊によって、頓挫又は計画の変更を余儀なくされている。本報告の目的は、こうしたリゾートブームの反省の上に立って、21世紀における観光のあり方について、私論を展開することである。その際、観光の解釈、観光の形態、世界遺産などを概説することで私論の構築を行った。

2. 観光の解釈

(1) 観光のルーツ

観光および関連する観光現象は、一口で表現することはできない。観光の内容や形態は実に奥深く、複雑多岐にわたっている。観光の語源は、中国古代の『易経』¹⁾の「観卦」のなかの「観国之光、利用賓于王」(国之光を観るは、用いて王于賓たるに利し)である。朱子学の立場での解釈では、「国の栄光を観る。それをますます輝かすことを願えば、王の賓客として優遇されよう」となり、政治的な解釈が主体であった。しかし、今日では「国の光、すなわち優れた文物や制度を観察することは、その国の王の来賓として(扱われるのに)ふさわしい」という解釈が一般的である。国に対する考え方は自国と他国に分かれるが、観光研究者の大半は他国とする者が多い。

わが国において観光という言葉が定着したのは大正年間で、それまでは「漫遊」という言葉が用いられていた。観光の「観」は「みる」と同時に「しめす」という意味を持っており、観兵式、観艦式などのように、「観」には「国威の発揚」「国力の誇示」が含まれていた²⁾。観光の今日的な解釈では、英語の tourismの方が分かりやすい。tourismは「travel for pleasure」を意味し、「楽しみ旅行」と訳される。

わが国の観光のルーツは、物見遊山、湯治、参詣などである。しかし、中高年層の場合、観光と言うと、いまだにマイナスのイメージを持っており、観光にまつわる負の部分は完全に払拭されたとは言いがたい。その背景として、高度経済成長期においてピークを迎えた男性客主体の1泊宴会型観光があげられよう。いわゆる「旅の恥はかき捨て」型の観光で、酒、芸者、ドンチャン騒ぎなどがキーワードであった。

(2) 観光の定義

観光の定義は様々な立場で行われているが、決定的な定義はいまだに存在しない。広義・狭義両面から検討は加えられているが、現在のところ、共通理解を得ている部分は「日常生活圏を離れる・移動を伴う」「楽しみや気晴らしという目的がある」「何らかの行動・活動を行う」の3点に集約されよう。

観光の狭義の定義は sightseeing(サイトシーイング、見物)であることに異論をはさむ者はおそらくいないであろう。要は広義の意味での解釈の仕方である。筆者は当初から広義の意味でとらえており、「楽しみ旅行とそれに伴う諸活動」を観光とみなしたい。当然のことながら、観光にはレジャー、レクリエーション、スポーツなどの諸活動も含めている。なお、レジャーは「時間」の概念で、1日24時間の内で睡眠や仕事(学校)以外の時間、つまり余った時間を利用することがレジャーとなる。レクリエーションは「活動」の概念で、労働に対しての気晴らし、気分転換的な要素が強い。ツーリズムは「空間」の概念で、場所的な移動を伴う。

3. 観光の形態

(1) 観光資源

観光資源は、自然資源と人文(社会)資源に大別できよう。自然資源は、原則として自然のままの状態、人間の手が加えられていないものをさす。具体的には、山岳、高原、海岸、海洋、湖沼、河川、温泉、動物、植物などがある。「白砂青松」「花鳥風月」などの風景も自然観光資源である。

人文観光資源は、人間が創り上げたもので、古いところでは、神社、庭園、仏像など、新しいところでは、高層ビル、テーマパークなどがある。工場、農場などの産業施設も人文観光資源であり、自然資源に対して幅広い構成をなす。

環境問題が世に出てすでに久しいが、環境・景観・地域などをテーマとした観光資源として、郷土景観、集落景観、産業景観などがある。こうした資源は、新しいようで比較的古い資源だが、観光の客体サイド(主に観光業者)では、従来、ビジネスにならない資源であった。バブル経済期では、リゾート法のからみで、安易な大型施設(例えば、一部のテーマパーク)などを作ることによって、集客を図るパターンが顕在化した。しかし、後述するように「地域観光」の視点で観光をとらえた場合、環境や景観などは最も大切な資源として位置付けがなされよう。

別府市を中心として一例を示すと、郷土景観としては、鉄輪温泉の湯煙り、別府温泉の石垣、由布院温泉の朝霧、集落景観としては、鉄輪温泉(いでゆ坂)の貸間旅館群、十文字高原からみた別府温泉郷、産業景観としては、明礬温泉の湯の花小屋などがあげられる。

(2) 観光の古い形態

江戸時代の観光は、物見遊山、参詣、湯治に集約されよう。物見遊山は、今日の観光活動に最も近い形態で、桜の花見や紅葉狩りなどがある。日本三景、近江八景などは風景の

観光、いまで言う景観観光の代表例となる。湯治は、温泉を利用して療養、休養することを目的とする観光の形態で、温泉によって病気やケガを治すことが、湯治の原点ということになる。食事も自炊が原則で1週間程度が最低の宿泊単位となる。

参詣は、江戸時代において庶民に最も人気があった観光の形態である。その頂点は伊勢参りである。伊勢参りは、文字通り信仰を主とする宗教的行事だが、庶民は参詣にかこつけて遊興を楽しむことも多かった。「旅の恥はかき捨て」という言葉が登場したのもおそらくこの時期であろう。浅草は、東京の最も伝統的な観光地だが、古くから浅草寺の門前町として発達した。江戸の人々は好んで浅草寺に参拝した。老若男女の区別なく庶民の大半は浅草寺裏の奥山(盛り場)で遊びや気晴らしを行い、一部の成人において、男性の場合は吉原の遊郭通い、女性は猿若町の歌舞伎通いを楽しみとしたのである。

(3) 観光の新しい形態

バブル経済の崩壊によって、環境・景観・地域・文化などをキーワードとした観光の新しい形態が市民権を獲得した。

① エコツーリズム

バブル時代のリゾートブームに変わる新しい観光として登場した。観光地の自然環境をより一層大切にしようとする主旨でスタートした。旅行者一人一人が自然環境は人類共有の財産、かけがえのない観光資源であるという観念に立ち、自然環境の汚損、破損、破壊を許さないという問題意識を持つことにある。

わが国は遅ればせながらユネスコ(国連教育科学文化機関)の「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」(通称・世界遺産条約)を批准し、白神山地(青森県、秋田県)、屋久島(鹿児島)、法隆寺(奈良県)、姫路城(兵庫県)の登録を果たした。1992年のことである。一方、1993年にはラムサール条約の釧路会議が開かれ、釧路湿原(北海道)など9カ所の湿地を指定し、エコツーリズムがしだいに注目を浴びるようになった。エコツーリズムは、エコロジー(環境、生態)とツーリズム(観光)を組み合わせた造語である。生物学的な視点や自然保護、観光産業、地域振興など様々な観点から解釈がなされてるが、統一的な定義は難しい。

環境庁の定義では、「エコツーリズムとは、計画的に環境を保全しつつ行なう観光旅行であり、豊かな自然資源、自然環境地域において、その自然を保全・維持していくことを目的に、自然や文化を観光旅行者に情報提供し、教育し、環境への意識の向上を図るもので、観光収入による地域の振興を図ることによって、以上のシステムを維持継続することが可能なもの」となる。

(社)日本旅行業協会では、「地球にやさしい旅人宣言」を用意し、旅行者に対して自然を守るための呼びかけと啓蒙活動を行っている。

「綱領」としては、

1. 私たちは美しい地球を守り、次の世代に残します。
2. 私たちはかけがえのない自然や文化遺産を大切にします。

3. 私たちは訪問先の歴史や文化伝統を学びます。

「スローガン」としては、

1. 自然の花や食物を大切にしましょう。
2. 野性動物をやさしく見守りましょう。
3. 希少動植物の製品を買わないようにしましょう。
4. ごみはすてずに持ち帰りましょう。
5. 資源の節約をいつも心掛けましょう。
6. 遺跡や文化財を大切にしましょう。
7. 訪問先の人々の習慣や生活様式を尊重しましょう。
8. 訪問先の国の言葉をお話するように努力しましょう。

ポストバブル経済期において、わが国でもエコツーリズムと銘打ったツアーが目立つようになった。例えば、東南アジアでの植林ツアー、アマゾン川のジャングルトレッキング、南極のホエールウォッチングの旅などである。

観光における環境問題への取り組みは、観光産業だけに見られるものではなく、受け手である観光地サイドにおいても様々な取り組みが行われている。日光(栃木県)、尾瀬(群馬県)、上高地(長野県)など日本を代表する国立公園において、地域の自然環境を自動車の排気ガスから守るためにマイカー規制をしている例がある。さらに日光と上高地においては、排気ガスの発生が少ない電気自動車など低公害自動車の導入が進んでいる。

②グリーンツーリズム

バブル経済期の大規模リゾート開発に対して、反対の立場でグリーンツーリズムが登場した。昔からの田舎の景観を生かし、緑地空間を大切にしたい観光である。地域と自然の共存をめざした地域おこし型の観光で、大分県では湯布院町、安心院町、耶馬溪町などが取り組んでいる。1970年代半ばに発生した農山漁村など第1次産業地域における民宿ブームに似た形態でもある。

アグリツーリズムは、アグリカルチャルツーリズム、すなわち農業観光のことで、グリーンツーリズムと共通事項が多い。ヨーロッパから普及したもので、都市住民に農村生活を体験してもらう形態である。具体的には、農家の一部を民宿として開放し、観光客が滞在するパターンである。

③ヘリテージツーリズム

イギリスが発祥地で、遺産観光、遺跡観光とも言う。邸宅や古城、鉄道や工場など、歴史的な遺跡や産業遺跡などを巡る形態である。イギリスではガイドブックも整備されており、文化遺産に対する取り組みの深さが痛感される。

「ナショナルトラスト」はイギリスで発祥した。この組織は歴史的な遺跡や産業遺跡などの観光資源を保護するために、価値のある土地や建物を組織として買収し、保護・保全しようとする運動組織である。こうした地道な組織活動があつてこそ、ヘリテージツーリズムが生きてくる訳である。日本では「観光資源保護財団」があり、着実な活動を展開し

ている。

④アーバンツーリズム

現象としては、わが国では1973年の石油危機以降に登場した。安定経済成長期において、安・近・短(安価・近場・短期間)観光、近隣レクリエーションなどの普及で一般化した。簡単に言えば、都市型観光、都会観光であり、主な活動内容は、街歩き、ショッピング、ウインドーショッピング、美術館などのアートの鑑賞、コンサートやイベントの見学、グルメなどがあげられる。東京では、青山、原宿、渋谷、代官山、自由が丘などが、商店街としてではなく、いわゆるファッションタウンとして、マスコミの注目を浴び出した頃からしだいに定着し、バブ経済期において全盛を迎えた観光の形態である。

4. 世界遺産と観光

(1) 世界遺産とは

日本は1992年に世界遺産条約を締結した。しかし、同条約は1972年のユネスコ総会で採択されており、日本は20年ほど遅れて批准したことになる。人類にとって普遍的な価値を持つ世界遺産について、国際的な協力の元で保護して行こうとする条約である。この条約の採択を契機として、遺産の保護活動がグローバルな視野で高まることになった。

地球上には、貴重な自然環境が残された自然遺産、人類の足跡を知ることができる遺跡などの文化遺産、その双方を含めた複合遺産が沢山存在する。世界中の人々が協力して遺産を守ろうとする意識が芽生えたのは1960年代のはじめである。ナイル川(エジプト)でアスワンハイダムが建設されることになり、アブシンベル神殿などヌビア遺跡群の貴重な遺産が水没の危機にさらされたのである。この時、ユネスコは日本など20ヵ国以上の協力を得て、遺跡救済のヌビアキャンペーンを展開した。その結果、アブシンベル神殿は移築され、危うく難を逃れることができたのである。

この事業をきっかけとして、人類共通の遺産について国境を越えて守ろうとする意識が広がり、文化遺産の国際的保護が主張される運びとなった。世界遺産条約の第1の目的は、世界遺産委員会(加盟国を代表する専門家グループ)の定める登録基準に基づき、自然遺産、文化遺産、複合遺産を世界遺産リストに記載することである。同委員会は年1回開催され、各締結国から推薦された自国内の物件を関係団体の評価調査に基づき、リストへの記載を審議する。1996年1月現在、世界104ヵ国、469件(内訳は、自然遺産102件、文化遺産350件、複合遺産17件)を数える。

(2) 日本における世界遺産登録

1997年現在、わが国における世界遺産は8件を数える。自然遺産としては、東アジア最大級のブナ原生林「白神山地」、縄文杉で名高い「屋久島」、文化遺産としては、木造城郭建築の美しさを誇る「姫路城」、世界最古の仏教建造物「法隆寺地域の仏教建造物」、17の社寺・城を含む「古都京都の文化財」、平家の落人が住みついた「白川郷・五箇山の合掌造

り集落)、宮島の「巖島神社」、広島「原爆ドーム」などがある。現在、古都「奈良」が推薦されている。

(3)大分県における世界遺産登録の可能性

大分県は九州を代表する観光県であり、いわば観光資源の宝庫である。国際的な観光資源も多く、世界遺産として登録することによって、人類のかけがえのない資源として永遠の環境保全を行いたいものである。

①豊の国の石仏群

大分県は石仏が実に多い。代表的な石仏として、臼杵石仏(臼杵市)、熊野磨崖仏(豊後高田市)、元町石仏(大分市)などがあり、大分県は石仏の宝庫である。これらの石仏群は、シギリアロック(スリランカ)に勝るとも劣らない遺産であり、国東半島の石仏を含めた豊の国の石仏群として、世界遺産登録を果たしたい。

②豊の国の地獄群

温泉の源泉数は、別府温泉が日本1位、湯布院温泉が日本2位で、湯煙りと合せて、地獄(源泉)地帯を世界遺産として推薦する価値がある。温泉の湧出量では世界1位のイエローストーン国立公園(米国)が世界遺産であり、世界2位の別府温泉が世界遺産であっても何ら不思議なことではない。その際、坊主、海、血の池、竜巻などの地獄めぐりが中心的施設となるが、周囲の環境づくりにもう少し神経を使いたい。

③豊の国の小京都群

江戸時代の豊前国と豊後国の2ヵ国からなり、幕府の方針によって小藩が分立していた。そうした関係から大分県は城下町に恵まれ、臼杵、杵築、佐伯、高田、竹田、中津、日田など個性的な小京都が点在する。こうした小京都群の集中はロマンチック街道(ドイツ)の古城群にも匹敵すると思われる。武家屋敷、町屋、白壁(土塀)などの修復・復元を通して、小京都としての街並みの整備・再現など、未長いまちづくりを推進したい。

5. 21世紀における観光のあり方

(1)観光の時代

21世紀は観光の時代である。企業や官庁の週休2日制の浸透、お盆及び正月における長期休暇の普及などで余暇時間は着実に増大し、また新幹線や航空機、高速道路網などの発達によって、観光の行動範囲はますます拡大傾向にある。観光産業は政治・経済の安定の上で成立・発展する平和産業だが、21世紀においてどこの国や地域においても、主要産業の一つとしての位置づけがなされよう。

バブル経済期において、わが国の消費水準はピークに達した。すなわち、暖衣飽食、モノ余りを経験し、かつての王侯貴族御用達の高価なファッションブランドに至るまで、手元に置くことが容易になったのである。しかし、ポストバブル経済期では、残業の打ち切りによる賃金の減少、不景気風による社会不安のあおりなどで、購買意欲の減退、買い控

え、買い惜しみなどが続き、景気の好転は厳しい状況にある。

とはいえ、産業的にみた場合、商業界においては、コンビニエンスストア、ディスカウントストアなどが健闘しており、すべての業種・業態が苦戦を強いられている訳ではない。確かにモノに対する消費は飽和状態にあるかも知れないが、サービスの分野では何らかの刺激策で、消費回復につながるものと確信する。意欲的な小規模旅館においては、従来と異なりあわなかった昼食の導入にはじまり、21時スタートの宴会、ビジネスパック、宴会(コンパニオン)パックなど各種企画商品を開発することで、消費者ニーズを取り込んだ経営を実践し、営業努力を続ける旅館もみられる。

不況下の観光は、一般的には安・近・短観光となるが、これを逆手にとることも戦略となる。大分県に限れば、安・近・短観光の市場(観光客の誘致圏)は福岡県、広島県などとなるが、何も大量観光や広域観光を期待するのではなく、近隣レクリエーションの一貫として、日帰り観光客の対策などを推進すれば、ビジネスチャンスは拡大することになる。1997年の日本経済は石油危機以来のマイナス成長となり、サービス業としての観光産業を取り巻く今後のビジネス環境は先行き不透明である。しかし、旅館業を中核とした観光産業は代表的なホスピタリティ(おもてなし)産業であり、限界の知らない産業である。各種サービスを求める人間の欲望は無限であり、留るところはないであろう。旧態依然とした待ちの経営ではなく、豊富なアイデアを駆使した攻めの経営実践で、不況風を突破して欲しい。

(2) 地域観光－21世紀型観光地の方途

わが国の主要観光地の大半は、安定経済成長期において成熟段階に達し、ポストバブル経済期ではその方向性を模索している。別府、熱海、伊東などの温泉観光地に代表されるように、主要観光地のみが大量の観光客を集めた高度経済成長期のような一人勝ちの状況は遠い過去のものとなる。21世紀においては、環境・景観・地域・文化などをキーワードとした地域観光・教養観光を推進させたいと願う一人である。欧米では、分厚い観光ガイドブックを手にした老夫婦が地域散歩を楽しむ、いわゆる教養観光が広く普及しており、観光を通して学ぶという精神が徹底していると聞く。わが国でも地域観光が浸透しつつあるとはいえ、まだ緒についたばかりである。地域の自然や歴史、産業や文化など、その地域のらしさや魅力を求める形態こそが地域観光であって、地域間相互の交流(地域交流)を主体とした地域観光を21世紀型の観光としてとらえたいと思う。地域観光に対応する観光地は各地域に存在し、大地がある限り無数である。地域は限られた領域だが、例えば1つの地方自治体の範囲を1つの観光地と認定した場合、自治体の行政地域全体が観光領域となり、観光地を構成することになる。観光地サイドでは、お国自慢的な立場で観光地づくりをするだけで充分であり、何も大規模な観光施設を造成する必要はない。

つまり地域のあるがままの姿を見せ合うことが地域観光であって、地域交流、地域理解なのである。商業界では、コンビニエンスストア、スーパーマーケット、ディスカウントストアなどの出現で商店や商店街の画一化が進み、交通条件に恵まれない伝統的な商店や

商店街は個性を失いつつある。観光地として同様であって、リゾートホテル、ゴルフ場、テーマパーク、リゾートマンションに代表される金太郎飴的な観光空間は決して好ましいとは言いがたい。バブル経済期で計画されたリゾート型の観光地域計画は、現在、方向転換を余儀なくされ、その方途をいまだに模索する観光地も少なくない。地域の環境と景観、歴史と文化など地域の個性やらしさを大切にされた地域性豊かな観光地こそが、ポストバブル時代、はたまた 21 世紀型の観光地域であり、地域住民参加型のまちづくりやむらづくりによる観光地域の創造に全力を傾注したいものである。

平成不況を克服した 21 世紀において、観光の日常化・生活化は一段と進展するであろう。とはいえ、わが国の観光地は、海外の観光地やリゾートとの対決、日本国内の観光地との競争など、今後の観光地は難問が山積みしている。着実なまちづくりやむらづくりを進める地域性豊かな観光地域、セールスポイントの確立した観光地域こそが、いつまでも国民の支持を集めて欲しいと願うものである。

付記：本報告は、以下の講演原稿、図書の一部を参考にして論旨を構成した。

浦 達雄(1997)：「環境と観光資源」、別府大学短期大学部公開講座。

浦 達雄(1998)：『観光地の成り立ち 温泉・高原・都市』、古今書院、190 頁。

【注及び参考文献】

1)丸山松幸訳(1965)：『易経』、徳間書房、p. 101 - 103。

2)馬勇主(1998)：『旅遊学概論』、高等教育出版社(中国)、p. 1 によると、観光という言葉は『左伝』の中にも「観光上国」と記載されているとのこと。しかし、筆者は原著を確認していない。

3)足羽洋保編著(1994)：『新・観光学概論』、ミネルヴァ書房、p. 1 - 2。